

Title	がん哲学外来（2013年度 聖学院大学総合研究所カウンセリング研究センター主催：臨床死生学研究講演会）
Author(s)	越智，裕子
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.23-No.2, 2013.12 : 30-31
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5026
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

2013年度 聖学院大学総合研究所カウンセリング研究センター主催 臨床死生学研究講演会 がん哲学外来

2013年9月20日、聖学院大学総合研究所カウンセリング研究センター主催で、2013年度臨床死生学研究講演会が聖学院大学教授会室で開催された。講演者は、順天堂大学医学部 病理・浮腫学 教授 樋野興夫氏で、同氏は、がん哲学外来の専門医である。今回は、「がん哲学外来」とのテーマで、樋野氏が多くの実践哲学に基づいた内容を講演している。

樋野氏は、まず昨今のがん統計について説明した。現在、我が国の年間死亡者数は、約100万人、その内33万人の死亡因ががんである。2人に1人はがんを発症し、そして3人に1人ががんにより亡くなる時代となっている。がんの発生は避けられない現実である。しかし、近年の医学や医療技術の進歩により、将来的にはがんを克服することができる世界が来るかもしれない。

がんには、胃がん、肺がんなど様々な種類がある。いずれのがんでも共通していることの1つに、それには必ず原因があり、同様のプロセスを経てがんになっていく。そのため予防可能なものである。更に、がんの特徴として、血管に入り込み移動が可能なことがある。血管中には白血球があるため多くは死滅し、転移の可能性はわずか1%であるが、転移後も継続して細胞を増殖させていくこと

ができる。がん細胞の研究がはじめられてから、100年が過ぎ、未だ予知できないものがある。そのため、本当のがん医療の専門家は、曖昧なこと、分からないことは答えないものである。それが、患者にとって、疾患を持つ自己に対する認識を混乱させる要因ともなりうる。がん疾患を持つ患者に対し、同氏の実施するがん哲学外来の考えは、がん研究者のがんの捉え方を重要視し、捉え方が行動や態度に影響を及ぼすため、がん研究者のがんの伝え方に影響を及ぼすのである。がん患者が疾患を抱えながらも笑顔で人生を生きる、そのような社会を目指し2008年からがん哲学外来に取り組んでいるという。

このがん哲学外来は、2005年成立したがん対策基本法に基づき、がん相談が義務化されたことにより保険診療として実施されている。現在は、キャンセル待ちが月80件もあるほど、関心の高い診療領域となっている。がん哲学外来、がん哲学学会の内容については、聴衆者からの質疑応答を受ける形で以下の通りに説明しているので参考にしてもらいたい。

質疑：病名告知された聴衆から、自分が死ぬことで周りを悲しめたくない。

応答：がん哲学外来では、まず座っていただき、お茶を飲みながら、来院理由について、最初の15



樋野興夫教授



分間は毎回尋ねているという。このときの答えは十人十色で、表情を見ながら話を聞くとどういった話をした方がよいのか分かるという。また、色々話を投げかけてみて、患者がどの言葉に一番響くか様子を見ながら見つけていくという。

質疑：がんサバイバーの聴衆者は、患者やその家族に寄り添うこと以外できることはあるのか。

応答：支えることはできないが寄り添うことはできる。病院内に設置されたカフェに患者が来る。それも困難なときはベットサイドまで行くのだが。必ず聞くことは、この病院はどういう病院かと尋ねるといふ。すると都会より地方の病院の方が自分に親切に対応してくれ、自分に関心をもってもらえるという。日本人は困った人の側にいるのに慣れておらず、すぐに離れたがる。小さいときから自分のより困っている人に会ったことがないのだ。そのため、困っている人に寄り添うという、がん哲学学会を教育の一環として使用しているという。

質疑：不安や恐れに対応するためのカウンセリングと、がん哲学学会とはどこが違うのか。

応答：日本の心理学は傾聴ベースである。がん哲学学会は、15分は傾聴するが、それ以降は自分の覚えている事柄について話し、患者と対話することを大切にしている。本当に苦しい人は話せないものである。なので、対話を行うことが大切である、余計なおせっかいと、偉大なるお節介とは違うという。

質疑：牧師の聴衆者は、がんの方々と接することが多く、その方々に何を語ればよいのか悩んでいる。

応答：クリスチャンが相談にくるが、教会の中ではそれを話す場所がない。例え、話ができて、3分聞いて、お祈りされて終わるといふ。これは医者が患者の顔を見ずに診察するのと同じである。一人の人間のために時間を割いて使うことが大切

である。

(文責：越智裕子[おち・ゆうこ] 聖学院大学大学院アメリカヨーロッパ文化学博士後期課程)